



彙報 : 平成27(2015)年度 海港都市研究センターの活動

樋口, 大祐(文責)

(Citation)

海港都市研究, 11:81-83

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009374>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009374>



彙報

平成 27 (2015) 年度 海港都市研究センターの活動

2015 年度の海港都市研究センター（以下、海港センターと略称）では、大学院人文学研究科における共通科目授業の開講、第 11 回・第 12 回海港都市国際会議、韓国海洋大学を中心とする WCMCI 国際シンポジウムへの参加、映画上映会、紀要『海港都市研究』第 11 号の刊行等の諸事業を行った。

（1）人文学研究科共通科目の開講

今年度は前期に大学院博士課程前期課程の大学院生向けに「海港都市研究交流演習」、後期に大学院博士課程後期課程の大学院生向けに「海港都市研究企画交流演習」を開講した。

前者では樋口准教授、佐々木准教授、大津留教授、藤田教授等を中心に、世界文学・戦争・海港都市等をテーマとして、受講生が自ら選択したテキスト

（翻訳を含む）について研究発表を行い、受講生全員で討議するというスタイルをとった。一国文学的枠組みに収まりにくいテキストを選ぶという点では昨年と同様だが、今年度はさらに戦争の記憶とその変容というテーマ性を重視した。また、非常勤講師として、立命館大学の西成彦氏および大東文化大学の中村隆之氏をお招きし、ラフカディオ・ハーン及びフランツ・ファノンに関する刺激的な演習授業を行っていただいた。

後者では真下教授を中心に、昨年度同様、受講生がそれぞれの専門分野における重要な研究論文のレビューを行うことを中心に演習を行った。先行研究的確なレビューを行うためには、当該分野における多様な問題系に対する鋭敏な関心と、幅広い知識・見識を併せ持つことが必要である。受講生が当該演習の受講を通じて、自身の専門分野の特性を理解する上で有意義な自覚をもつことに一定の成果を得たと考える。

（2）WCMCI 国際シンポジウム及び第 11 回海港都市国際会議（2015 年 4 月 24－25 日、於台湾台北・中央研究院）

海港センターは例年、木浦大学・韓国海洋大学・台湾大学・中山大学・長崎大学等をパートナーとして持ち回りで国際会議を開催し、若手研究者に国際的な場における研究発表の機会を提供するとともに、韓国海洋大学を中心とする世界海洋文化研究所協議会・WCMCI（The World Committee of Maritime Cultural Institutes）の枠組みの代表者会議及び国際学術シンポジウムにも参加してきた。

2015 年度は台湾中央研究院（及び台湾大学）が 4 月に両者の枠組みを連動させる形で国際会議を開催し、神戸大学の海港センターからも奥村弘教授、

樋口准教授、および大学院生1名（小谷真千代）が参加し、有意義な報告及び討論に参加した（奥村教授と大学院生の報告要旨は本号に掲載している）。

（3）第12回海港都市国際会議（2016年2月20—21日、於長崎大学）

2015年4月の第11回海港都市国際会議に続く第12回海港都市国際会議は、開催機関である長崎大学の事情により、2015年度内である2016年2月に行われた。神戸大学の海港研究センターからは、樋口教授のほか若手研究者3名が参加した（報告要旨は本号に掲載）。

当該会議では、これまでの交流実績を踏まえて、海港都市研究の理論構築のための積極的な意見交換が行われた。特に、いわゆるグローバル・ヒストリー研究と海港都市研究との共通点と差異に関して活発な議論が行われ、海港都市はグローバルな動きとローカルな動きの交差点であること、西洋中心史観からの脱却が別の中心を生み出すことを避ける必要があること、パワーポリティクス的な意味での「中心」に追随しないような現象を扱う際の思想的根拠（たとえば「人権」等）を鍛える必要があること、等の意見が出された。

また、21日午後に各参加機関の代表者会議が行われ、来年度の開催機関決定に至る手順について合意に達した。

（4）映画上映会

2015年12月5日、「知日台湾・読書青年」ネットワーク、及び台湾の高雄映画センターの主催、海港都市研究センター等の協力により、『高雄短片×日本四地：高雄短編映画で台湾を知るリレー上映会』の二日目が神戸の中華民国留日神戸華僑総会で開催された。

台湾の高校野球選手の夢と挫折を描いた『黒夜来臨：暗闇の訪れ』（張凱智監督）、国際結婚で台湾にきた東南アジアの女性の夢遊的な彷徨を描く『海上皇宮：海の上の宮殿』（趙徳胤監督）、同性愛者である娘と母親の葛藤を描く『海倫她媽：北極で結婚式を』（黃靖閔監督）の三作が上映され、人文科学研究科博士課程後期課程在籍の台湾人留学生（劉靈均）が司会、樋口教授がコメンテーターを務めた。高雄は台湾のみならずアジア有数の海港都市であり、1980年代の民主化運動以来の市民文化の伝統を有している。今回上映されたフィルム群もいずれも鋭い問題提起に満ちたものばかりであり、今後の継続的な交流が望まれる。

（5）『海港都市研究』第11号の刊行

2016年3月、当センターの紀要『海港都市研究』第11号（本号）を刊行した。

（6）まとめ

2015年度は中東から欧州への大量の難民流入、パリにおける無差別テロ事件の発生、世界の不安定

化が進んだ一年であり、日本でも安全保障環境の変化を理由に、自衛隊の海外派兵を可能にする安全保障関連法が成立した年である。21世紀が「テロと難民の世紀」と化してしまう可能性がグローバルに進行する状況の中で、その状況に対峙しうる思想的・学問的視座が求められている。

他方、海港都市は一般に多くの移民との共存の経験を有しており、その「歓待と排除の歴史」から学びうることは少なくない。今後は関心を共有する他大学・他部局の機関やNPO等とも連携しつつ、外部資金の獲得を通じてより大きなプロジェクトを展開していくことを目指す予定である。

(文責：樋口 大祐)